

韓国の卵子提供とエッグ・シェアリング 「生命倫理法」にみる卵子売買防止策の医療人類学的考察

瀧上恭子

2005年1月、韓国において精子・卵子の売買と利益供与を禁じた「生命倫理および安全に関する法律」（「生命倫理法」）が施行され、親族等による無償提供以外の卵子の提供は禁止されることになった。だが女性の役割が婚家の跡取りを産むことに求められ、子供が産めなければ「七去之悪」（棄妻が認められる七つの事由）に従って離婚されることもある現状では、親族からの卵子の提供が望めない不妊女性は、卵子売買に頼らざるを得ず、「遠縁」の者からの無償供与等と偽っての卵子売買が後を絶たないでいる。

韓国において卵子の売買が大目に見られ、卵子提供が容認されるのは、韓国社会に父系出自を偏重する父系血統主義が浸透している故であろう。そうした父系社会にあっては、産みの母であれ遺伝上の母であれ「母」が必ずしも妻でなくても構わなく、ドナー卵子による子供であっても、夫の血を引く子が生まれるのであれば許容されるが故に、卵子提供が受け入れられることになる。また韓国において親族間とりわけ姉妹間の卵子提供に対する抵抗感が稀薄であるのは、兄弟姉妹の血縁を重視する血族主義が人々の意識に根付いているからであろう。韓国では1987年に卵子提供が開始され、近年毎年200～300例の卵子提供が行われているが、これまで親族間の卵子提供にまつわる紛争が報じられたことはなく、近親者による卵子提供であれば「純粹寄贈」とされ無条件に肯定されている。

韓国で卵子提供が開始された頃から1990年代の初めまでは、不妊医学界の主導の下で、韓国社会の血縁指向に依拠した不妊女性の実の姉妹をドナーとする卵子提供が推進されてきた。だがその後韓国女性の晩産化が急速に進んだことから、従来の卵子ドナー層が変化を余儀なくされ、親族間の卵子提供が適わなくなった。周知のように、卵子提供を行うにあたっては、排卵誘発剤の投与による副作用や後遺症等、ドナーとなる女性の心身に侵襲を及ぼす採卵施術を行わなければならない、卵子を提供してくれた女性がもし不妊症になったりした場合、医者は道義的責任を免れ得なくなる。そのため、韓国の不妊治療医の間では、親族から卵子を提供してもらう場合は、結婚して子供を産み終えている女性にしか採卵施術を行わないことが不文律となっている。そうした中で、卵子提供が開始された1987年は26.4歳であった韓国女性の平均初産年

齢が、「生命倫理法」が施行された2005年には29.1歳に上昇し、晩産化が顕著になった今日、卵子提供が可能な20代後半～30代前半で子供を産み終えている親族を探すのは容易ではなくなっている。また、韓国では跡取り息子の出産が女性の義務とされていることから、男児を産んでいない人には卵子の提供を頼みにくく、昨今親族からの卵子提供が一段と難しくなっている。

1990年代の中盤以降、親族による卵子の提供が困難になってゆく中にあっても、今日のようにIT化が進んでおらずエージェンシーも存在していなかった当時の韓国において、親族以外の女性の中からドナーを見つけるのは容易でなかった。そのような状況下で考え出されたのは、不妊クリニックで知り合った患者達が、「同病相憐」の精神の下に、不妊治療費を分け持つことを条件として卵子を融通し合う「卵子の共有」であった。だが不妊女性等によるドナー探しの方策として始められた「卵子の共有」は、じきに患者同士の助け合いから外れ、治療費の分担を超えた卵子の売買に発展するようになった。やがて1990年代後半に入ると、不妊クリニックに広まっていた卵子売買はIT化に伴って発達したインターネットを介して一般社会に拡散していった。そして2001年1月に卵子提供仲介会社の「DNA bank」が設立されると、卵子売買は公然と行われるようになり、日本人不妊夫婦等の渡航卵子提供を招来するまでになった。そのような状況下で「生命倫理法」が施行され、卵子売買が禁止されたものの、「陰性的卵子売買市場」（闇市場）が一向になくならず、「卵子売買カフェ（ネットコミュニティ）」の摘発が続いた。

そうした現状を憂慮した韓国政府によって2008年12月に「生命倫理法」が改正されて、卵子の無償提供の原則が改められ、不妊治療を受けている女性同士で「エッグ・シェアリング」を行う場合の実費補償が認められることになった。この法改正は、卵子売買を防止するべく、卵子の提供に伴う実費補償を認めることで、かつて「同病相憐」の精神の下に不妊患者等の間で行われていた「卵子の共有」を復活させ、不妊に苦しむ女性達の共苦共感に基づいた卵子提供のシステムを構築する試みであると考えられる。本報告で、改正「生命倫理法」の下でのこうした卵子売買防止策について医療人類学の視点から検討を加え、韓国社会の文化伝統になじむ卵子提供のシステムとはいかなるものか考察してゆきたい。

キーワード：卵子提供、卵子売買、エッグ・シェアリング、「同病相憐」、医療人類学、